

# 統一



第百八十六號

明治三十三年二月廿四日第三種郵便物認可  
昭和十三年七月十五日發行第一號  
郵政省告示第十五號

(每月一回)

(東京 三島印刷株式會社印刷)

本 號 目 次

光ある信仰

佛教の修養に就て

獨立自營の精神

報 道

本 多 日 生

野 口 日 主

關 田 養 叔

法華經講演集(自六三頁至七二頁)

本 多 日 生

光ある信仰

(六月十五日妙典研究会に於ける講演、石川顯隆筆記)

本 多 日 生

法華經には於我滅度後應受持斯經是人於佛道決定無有疑、或は速爲疾得無上佛道等云云、此記文虚しくして我等が成佛今度虚言ならば、諸佛の御舌もされ多寶の塔も破れ落ち二佛並座は無間地獄の熱鐵の牀となり、方寶寂の三土は地餓者の三道と變じ候べし、争かざる事候べさや、あられたのもしやたのもしや、如し是思ひつゞけ候へば我等は流人なれども身心共にうれしく候也、大事の法門をば晝夜に沙汰し成佛の理をば時々刻々にあちはう、如し是過ぎ行き候へば年月を送れども久からず、過る時刻も程あらず、例せば釋迦多寶の二佛塔中に並座して法華の妙理をうなづき合ひ給ひし時、五十小劫佛神力故合諸大衆謂如半日と云ひしが如く也、劫初より以來父母主君等の御勘氣を蒙り、遠國の島に流罪せらるゝの人、

我等が如く悦身に餘りたる者よもあらじ、されば我等が居住して一乘を修行せん處は何れの處にても候へ常寂光の都たるべし、我等が弟子檀那とならん人は一步を行かすして天竺の靈山を見奉り、本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふ事うれしとも申す計りなし、

今日は妙典研究会の例会でありまして、何か有益な話しが致したひと思つて先刻から考へて居りました結果、今日は「光ある信仰」と云ふ題で御話し致さうと思ひます、之を専門の言葉で申しますと、本門の大圓戒と云ふのであります、モ一つ言ひ換て見れば「成佛の味ひ」とも云はれませう、之は中々六づヶ敷の自分で御話しするに力ある事と思ひます、

宗教は吾人の現在の生活と未來とに對して、偉大なる力と永久の生命とを與ふるもので、必要缺くべからざるものであります、その妙味を味ふ事は容易ではありませんが、例へば寂光の都と云ふ様な事でも、之を正しくかみしめる人は甚だ少ないのである、然し之をよ

く味つて行くのが最も肝要な事である、現今世人の多くは、宗教が未來とか成佛とか云ふ様な迂遠な事を云つて居てはいけない、何でも現實の上に直ちに光ある教を説かなければだめだと云つて居る、この方面は無論大切な事であるが、然し人生は只淺薄な現實の生活ばかりではいけない、その奥に深遠な實在の考を認めなければ、眞の價值ある生活とは云へないのである、宗教が未來とか成佛とか云ふ事を云ふのは、この點に充分力を入れて説くからである、世間は只その枝葉のみを目的として居るが、宗教は其の根本となるべき基礎を教えて居るのである、丁度掌中の玉の様なものである、又宗教が吾人に與ふる快樂とか苦痛とか云ふものは非常な力を有つて居るものである、世人は大抵苦樂と云ふ様なことでも上べばかりで考へて居る、婦人に就て云つて見れば、婦人は一般に生命の次が衣物であると云ふ事を思つて居る、故に自分の氣に入つた衣物を得れば非常に喜び、之を失へば大變落膽するのである、これは婦人ばかりでない、男子に就て云つても

場合は特別であるが、普通の場合に生命ほど貴重なものはない、上人の御言葉に、「圓浮第一の太子なれども短命なれば草よりもかろし、日輪の如くなる智者なれども夭死なれば生きたる犬に劣る」と云ふ警句があるが、實際其の通りで、命なければ萬事休すである、ところが人生と云ふものを少し深く考へて見ると、たとへ如何なる幸運の人でも、五十年か七十年で生命を奪はるゝと云ふ事は付て廻つて居るのである、斯様な僅かな年月の中に、滅亡の淵に沈淪すべき運命を有して居る人生に、眞の幸福とか快樂とか云ふものゝあるべき筈がない、故に宗教に依つて滅びない實在と一致する成佛の妙味を握つて、其の基礎の上に立たずんば眞の光ある生活は斷じて出來ないのであります、元來この人生を如何に觀るかと云ふに、人生觀に樂天主義と悲觀主義と超越的樂天主義との三つの見方がある、樂天主義と云ふのは、この人生に深入りしないでただ表面ばかりを見て、何もかも一向顧着なく存氣に世の中を暮して行くのである、この主義は今日だんだ

同じである、男子は婦人と少し趣を異にして居るが、男子の欲するものは名譽とか榮達とか云ふ事である、故に之を奪はるゝと云ふ事になれば非常に失望して、どんな事をして少しも面白くない、酒を呑んでもうまくなければ、何を見ても少しも愉快でないとか云ふ様になる、然し宗教の信仰を充分味ひ得た人があるならば、もし其人が自己の信仰を奪はるゝと云ふ事になれば、婦人が衣物を取られ、男子が名譽を奪はるゝ悲しみ以上なものである、又之に反して快樂を感ずる度合も同じことである、何故ならば前にも云つた通り、宗教の信仰は最も深い實在の觀念を吾人に與ふるものであるからであります、人生に快樂が如何に澤山あつても、それが皆意の儘になつても、又佛教で云ふ天上界と云ふ様な樂しき境界に居るとしても、生命が元で、生命がなくなれば一切の欲求を充すものは皆用がなくなるのであります、昔からよく「命あつての物種」と云ふが、之は實際人情を穿つた格言である、世間で道の爲に命を輕んずるとか、國家が危急存亡の時とか云ふ

ん流行る様である、然しとく皮想な見解である事は免れない、そこでモ少し深く立ち入つて考へて見ると、人生は中々そんな氣樂なものではない、一方には種々複雑な責任があり、又一方には何事も自分の意の如くならないと云ふ様な鹽梅で、四面八面世の中が煩さくて厭やでたまらん様に思はるゝ、これが厭世主義である、然しこれらの二つはいづれもかたよつた考で決して圓滿なものではない、故にこの二つを超越して、堅固なる立場をつかまへて、人生に處して行くのが、超越的樂天主義である、この考が最も尊いのであるが、この普通の人間の快樂と苦痛とを超越するには、どうしても宗教に依らんければ出來ない、宗教の信仰に依つて普通の快樂や苦痛に動搖を受けない基礎に立たなければならぬ、少し人生の寒さが厭しければすく風をひくとか、少しあつければ直ちに斃れるとか云ふ様では致し方がない、精神に安固な基礎を持つには、宗教の信仰を措て決して他にないのである、宗教は第一に人生の果敢なき缺陷多き側を充分説き、第二に

この現實の缺陷多き人生を離れて只理想世界と云ふ様な高遠なる考に上り、然して最後にこの現實と理想との調和を見來るのであります、

丁度佛敎の説き方がそつなつて居るので、最初の小乗敎では、この現實の人生の果敢ない不完全な側を充分に説き、この世の厭ふべき事を極論して居る、次に權大乘に至れば、この穢土と非常にかけ離れた、高遠な理想の方面を盛んに説いて居る、最後に法華經に來つては、この双方の調和を取り、最も完全な大敎調が示されて居るのであつて、この妙味を感得する人の甚ないのは甚だ残念であります、世間の敎と云ふ様なものは、大抵この根底を築かずして、只枝葉の上で種々論じて居るのであるから、その工合が丁度かけ合の様になつて居る、道德の上で、個人主義で行かふと思へば、そこに家庭あり親あり國家あり兄弟ありと云ふ様になる、又一方義務と云ふ様な事を考へて一時は服従するが、永い間には非常に窮乏になつて來て、じきに止めてしまふと云ふ様に、人生の事柄が皆假定的で、其上

(5)

いやな奴が若終つて廻つて居るのである、そつ云ふから人生の缺陷を考ふれば、實に諸行無常であります、佛敎に雪山童子の事が涅槃經に出て居て、世間でよくする話であるが、深く味つて其の精神を取れば、誠に有がたい意味合が含蓄されて居ります、雪山童子が世の中に尊い敎が得たひと云ふので、深山に入り種々苦心して道を求めて居りますと、或日向ふの谷間の方から「諸行無常、是生滅法」と云ふ聲が聞えた、この意味は如何なるものでも世の中に眞の常住なものはない、爛漫たる花も忽ち凋落し、如何なる美人と雖も久しからずして死の旅に就かねばならぬと云ふ意味の語である、これを聞いた童子は誠に有がたひ敎へであると感じたが、これだけでは物足りない、何かまだあとに續く言葉があるであらふと考へたが、それにしても全體何人が斯様な尊い敎へを唱へたのであらふ、その人に遭つて見たひと思つて、向ふの谷間へ行つて見ますと、非常に恐ろしい鬼の様なものが居ましたので、童子も驚ひたが其者に向つて、只今有がたい語を御唱へにな

に敎を立て、居るからさうなるのである、故に人生の問題はどうしても、この人生は果して常住なものであるか、又無常であるかと云ふ事を、充分研究して來なければ基礎が立たない、それでないと、丁度小供が賽の河原で石を積む様なもので、おきに破壊されてしまふのであります、佛陀はこの人生に四苦八苦のある事を説かれて居ります、第一は死である、これは如何なる英傑でも決して免るゝ事は出來ない、所謂生者必滅であります、然してこれは時々刻々吾人に迫りつゝあるのである、これから考へて五年の生命を有して居るものならば、こゝして居る内にも段々短縮されて行くのである、それが只自分ばかりでない、自分の最も愛する所の妻でも子供でも皆死に近づいて行くのである、又大恩を受けた親でも主人でも其の通りである、親を思ふ精神から考へれば非常に悲しひ譯であります、又人生の快樂と云ふ様な方面から見ても、青春の男女が結婚をすると云ふ事は寔に楽しい譯で、互に偕老同穴を誓つていつまでも生きる積りで居るが、死と云ふ

つたのはあなたでありますかと尋ねると、をれだと答へました、それではまだあとに續いた語がありませうから、どうぞそれを聞かしていたゞきたひと申しませうと、まだあとに大切な言があるが、之を語るには腹が空つて云ふことが出來ない、然しをれの食物は生物の肉でなければ食べないが、今朝から方々を見渡して居るが、未だ果報が盡きてをれの口に入るものが一つもない、故にそのあとを話すことが出來ないと云つた、そこで童子が然らば私の身體を供養致しますから、どうぞそのあとを説いて下さいと云ふことを誓つて聞たのが、あとの「生滅々已、寂滅已樂」と云ふ八字であります、この意味は人生の表面は生滅無常であるが、その奥の奥には常住不滅の實在がある、人はどししてもこの基礎の上に立たなければ、眞の快樂とか幸福とか云ふものゝあるべきものでない、この實在に觸れない生活は、浮いた生活であると云ふ意味である、童子は之を聞いて非常に喜びまして、たとへ自分はこゝで身を犠牲に供しても、どしか後代の者に聞かせたひと云ふ

大道念から、そこらの木の皮や石片等へこの四句十六字を書き付けて愈々約束通り鬼の口に入らふとして、高い艇から身を投げますと今まで鬼と見えた處のものが、忽ち一個の天人と變つて、衣の様なもので童子を受け止めて申されますには、實は汝を試す積りで鬼の形を顯はしたが、汝の道をも精神は實に見上げたものだその精神で道を傳へて行けと申されたこと云ふことが説てあります、この「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅已樂」の四句十六字はよく味つて見ますと、實に尊い教訓であります、日本の「いろは」四十八文字もこの句から出て居るのである、色は匂へど散りぬるを、我世たれか常ならん、有爲の奥山けんこえて、あささ夢みしるひもせず、京と云ふ字をつけたのは、終りのそこに常住の都があると云ふので、日本であとでつけたのであります、

この意味をも一つよくかみしめて見なければならん、人生は只つさらん果敢ない厭ふべき所であると云つて之を捨て、獨り山の中へでも入らんければ眞の

修行は出来ないものと思へば、佛教は世の中を力弱くしてしまふものであつて、若い者に必要がないのみならず、却つて人生に有害なものと云はんければならぬ、然しこれはこの現實の人生を穢土と見て、之を捨て、他に結構な極樂淨土があると思ふからいけないので、眞の佛教即ち法華經主義日蓮上人の教へは決して左様なものではない、上人が「極樂百年の修行は穢土一日の功德に及ばず」と仰せられてあるが、之は誠に尊い事であらふと思ふ、上人はこの煩雜な人生を捨てずに、この中で修行して行く、そこに廣大な功德が積めるのである、極樂で百年の永い間修行するより、この人生で一日の勤めをする方が、却つて功德が勝ると仰せられた尊い教訓であります、二宮尊徳翁の話に、越後から一人の百姓が江戸へ来て先生を訪ふて云ふには、私は越後の百姓であるが、國に居ても別に好い事がない故江戸へ出て参りましたが、こちらには何かよい仕事はありますかと申しますと、尊徳先生直に小言を云はれたのである、お前は百姓ならよく蚯

と云ふ蚯を知つて居るであらう、彼は夏になると土の中が暗くて熱くていやだと思つて、土の上へはひ出して来るが、土の上が中より却つて熱いので皆死んでしまふのである、お前も越後の様な田舎はいやだ、江戸へ行けばよい事が澤山ある様に思つて来たのであらふが、それは大變な了簡違ひである、住み慣れた越後を捨て、江戸へ来たとして何がよい事があるものか、うかうとすると蚯蚓の様になるから、早く國へ歸つて從前の仕事をせよと云つて、歸されたと云ふ話を或本で讀んで感心したのであります、人生も丁度これと同じで、この世の中には決して自分獨りで居るのではない、親もあれば妻子もある兄弟もあるのである、これらの親子兄弟等の關係を煩さいと云つて、この世を捨て、獨り山林に入らんとするのは、この越後の百姓が故郷を捨て、江戸へ出たと同じである、又蚯蚓が土の上へ出て斃れるのと同じであると思ふ、只淨土が樂しむと云ふので、何もかも打捨て、向ふへ行けばよいと云ふ様に考へては何にもならない、全體如何な

る者でも、ひやみに自己の立場を變へるとか捨てるとか云ふ事は、決してよい事ではない、宗教家なら宗教家として世の中に立てば、どこまでも宗教の立場を失はない様にして行かんければならない、輕々しく自分の立場を變更すると云ふ事は卑しむべきである、そこで最初に拜讀致しました上人の御妙判の意味合を考へて見ると、本尊に依つて信心決定して新しい生活に入ることである、今の信者は別に灌頂式と云ふ様なことをやらぬから區域が付かないが、昔はちやんと此人は信決定したものであると云ふ式を擧げたものである、これを本門の大圓戒と云ふのである、只人間が親から産んで貰つて成長したわけでは、決して満足なものである、とりしても宗教に依らんければ、精神ををちつける確乎たる基礎がさまならない、ところが宗教の信仰を深く味へば、人間の表面即ち身體は生滅無常を免れんが、その精神は不滅であつて、それが常に實在の境界と交通して居るのである、この意味合を警へて見れば、隅田川の向ふが深川で、こちらが日

本橋である、この川に橋も舟もないとすれば交通することが出来ない、この深川を人間界とすれば、日本橋は佛陀の境界である、ところで交通がなければ人間界は人間界、佛界は佛界で全然隔離されて居るが、もしこの両方へ橋を架ければ、身は深川に居ても心は時々日本橋へ來ることが出来る、宗教の信仰は丁度この橋の様なものである、信決定すれば生きて居ながら心は常に不滅の境界に入ることが出来る、即ち身は人界に居ながら心は佛界に交通するのである、こちらに信仰心があれば、佛陀の方よりも我がこの精神の内に交通せらるゝので誠に有難い譯であります、信仰が決定すればこの無限の妙味に浴することが出来るのである、これを妙覺位中の名字即の位と云ふのである、そこが娑婆即寂、光と云ふのであるが、これは非常に誤解し易い點である、理窟ではない實感である、多くは之を理窟で云ふとして居るから駄目だ、理窟で云へば此の身其儘佛であると云ふ様なことがいくらでも云はるのであるが、これでは何にもならない、又淨土で云

面に生ざることが出来るのであります、これがたゞ病氣ばかりでない、如何なる困難に遭遇しても同じことである、この點をよくかみしめて新しい生活に入るのである、上人が佐渡へ流されて、大分長い年月を経たが少しも長いとは思はない、丁度佛陀が五十小劫の長さ間を、僅か半日の如く思はしめたと言かれて居るが、日蓮もその通りであると御感じになり、又開闢以來種々の事情の爲に流された人々は随分澤山あらふが、日蓮の様に喜び身に充偏して居た者は、恐らく一人もあらずと仰せられたのは、實に尊い信仰の光に浴して、御精神が直ちに佛陀の境界に通つて御出でになつたからである、我々の肉眼を以て見るならば、實に見る影もない塚原三昧堂が、精神的に信仰の方より云へば寂光の淨土に通つて居るのである、この状態は身延記にもよく記されてあります、たゞそこの蜘蛛の鼻に露がかつて居る有様を御覽になつても、さうがにの糸玉を連ぬき」と云ふ様に美はしく感じ、又少しづつ流るゝ懸樋の水に紅葉の影のうつるのを御覽になれ

つても只理窟で、こともなげに娑婆即寂、光だと云ふ人が多いが、斯様なことを云へば法華經ばかりでない、法界圓融の理を説けるものには到る處に有る、そんなことで云ふのなら宗教でなくとも、哲學でも何でも云つて居る、兎に角我々は家に在つては一家の主人であり、國家の上より見れば一個の臣民であるが、法華經の信仰に依れば、實在常住の本佛と常に交通して居る本佛の愛子であります、上人の御妙判に依つて見ればこの實感が誠にはつきりする、日蓮は今佐渡國へ流されて居る淺ましい流人であるけれども、心は常に佛陀の境界に遊んで居る、又成佛の妙味を時々刻々に味つて居る故、少しも辛いとも永いとも思はないと仰せられて居る、これが人生の苦樂を超越して居る所謂超越的樂天であります、これは只日蓮上人の様な偉大な人にして始めて味へるかと思へば決してさうでない、信決定すれば誰にでも出来ることである、例へば永らく病床に横たはつて居る病人でも、この信仰に住すればこの病苦を超越して、佛陀の境界と交通する尊い方

ば、たゞちに「龍田川の水上也かくやあらん」と仰せられて居る、これが單にこちらの主観ばかりでない、「キリスト」も云つて居る、一輪の百合の花を見て、「ソロモン」の榮華の極みもこの花の美にしかずと實にその通りである、そのものを通して、モ一つ奥をつけばそこに直ちに絶對美と云ふものがある、自我偈に寶樹多花果、衆生所遊樂、とある如く、そこが居ながらにして寂光の淨土であると云ふのである、この關係を一步も行かすして天竺の靈山を見ると云ひ、本有の寂光土へ日夜に往復すると云ふのであります、この往復と云ふことをよく味んければならん、常に人間世界の深川の方で種々活動して居る吾人が、時々日本橋の方へ往復して無限の妙味に浴するのである、深川の人間が自分の立場を振り捨て、日本橋の方へ渡つてしまへば眞の佛教ではない、本有の光を認めて然も深川に居るのが貴い所である、佛教には兎と馬と象との三獸が河を渡る譬へがあるが、之は面白いことと思ふ、恒河を渡るに、兎は水の上を飛んで渡つて行き、馬は半身

水に入れて渡つて行くが、象は河の底を行くのである、この象の渡り方を菩薩の修行に譬へたのである、菩薩は自分獨り修行して、他の者を捨る様なことは決してない、佛教の信者は皆菩薩として、世の中の事を充分心配して行かんければならん、どこまでも人間と云ふ地盤を踏んでやつて行くのである、この人生に熱烈な信仰を持つて居れば、非常な喜びと勇氣とが顯はれて来るものである、この信仰より出づる無限の力を以て社會の萬事に處して行くなら、大抵な事は仕遂らるゝものである、彌々自分の力が盡きて絶えきれん時には、絶對の力が加はつて来るのである、丁度四條金吾が主人より勸當された時に、上人が、決して心配の顔もせず喜びの心を持つて家を出るが宜しひ、左様すれば必ず又喜びが来るものであると仰せられた、金吾は上人の御言葉通り少しも落膽の様もなく出て行かれたのである、其後主人も非常に感心して舊の領土を倍にして與へられたのであります、何でも正しき信仰を持ち正義の觀念に住して世に處して行けば、恐るべきものは

せん、これが涅槃經の信仰である日蓮上人の教であります (二六)

### 佛教の修養に就て

(七月十七日日蓮主義青年會講演、吉田堅晴筆記)

野口日主

今日は佛教の修養といふ演題で、少しく御話致して見たいと思ふのであります、諸君が御承知の如く彼の熊澤善山は、随分偉い學者で、世にも聞えて居る人でありませうが彼は常に生徒に向つて、學問といふものは、心を内に向はしめて居なければ何の役にも立たない、常に心を外に向け無我夢中で學ぶが如きは、縦令萬卷の讀書と雖も毛頭得るところ無しして了るものであるから、宜敷心を向内的にし、發憤勵精以て學ばねばならぬといふ、教訓せられたさうであります、漢學已に然り況や佛教の深理を學ぶに於てをやで、一層心を静めて向内的ならしめることが、最も大切であります、諸君は兼て御承知でありませう、彼の漢の高祖皇帝が、

ない、信仰がなければ如何に富有な生活をして居ても、そこに無限の歡喜と勇氣とがない、而して僅か五十年か七十年の短日月にして、滅亡の淵に沈淪すべき運命を持つて居るのである、之に反して信仰に住して居るものは、一生の生命が盡れば、忽ち常住不滅の佛身に到達する事が決定されて居るのである、之の限りなき喜びを日常生活の上に持ち來つて楽しむのである、之を時々刻々に味ふのである、今日一日は人間の果報として日比谷公園の花を見て樂しめば、これより以上の美は吾等が生命が終れば忽ち顯はるゝのである、この實在の精神を否定して宗教を論ずるならば、それはつまらないものであります、壽量品に心醒悟と云はれたのも、永久滅びない實在の佛陀を渴仰して心遂に醒悟するのである、如何なる困難な社會に立つてもこの信仰をふまへて行かんければなりません、日蓮上人が開闢以來流人が多くあつたが、日蓮程喜びを以て居た者はなからふと仰せられた様に、如何なる境遇に居ても常にこの光ある信仰を持つて行かなければなりません

書生時代に一日邊を逍遙して居られた、すると偶然にも彼の有名な秦の始皇帝が、嚴めしき行列で通られた、此を見た高祖は其の何人なるかを問はれた處が、秦の始皇帝の御幸であると聞いて、我も亦男子なり須らく斯くの如くなるべし、と爾來帝王となることをのみ心懸け、遂に漢四百年の太平を開くの基たる、高祖皇帝となられたのである、實に皇帝は一度始皇帝の行列を見てより以來、常に心を内に向はしめ、大丈夫須らく自己の如くなるべしとの一念は、始皇帝の行列を全く自己の心内に取入て、それが働き出して遂に立派な帝となられたのであります、此が若し反對に石川五右衛門の如き者を見て、我も亦斯の如なるべしと、五右衛門を取入るれば、第二の石川五右衛門となるのでありますから、人たるものは邪であり惡であることは、徹頭徹尾避けて、正であり善であることは決して逸することなく悉く自己に取收めて、之を磨き出さなければなりません、嘗て我が宗祖日蓮上人は、一切經を御覽になつて「一切經は我が身の日記文章なり」と仰せら

れましたが、之といふも上人は一切經を御覽になつて  
 全くそれを自己の心内に取入れられたから、一切經は  
 悉く自己一身を説明した日記であり、又文章である  
 か、の如く感ぜられたのであります、故に凡て何事によ  
 らず、自分に取入來つて始めて趣味も生じ、効能もあ  
 り、利益も得らるゝのであります。

然らば修養とは如何なることであるかと申すすと、之  
 は近來非常に流行する言葉でありまして、同じく修養  
 と申します中にも、東洋風もあれば、西洋風もあり、  
 折衷派もあるといふ様に種々様々であります、今東  
 洋風即ち儒教に就て申す修養は、所謂「明・明德」  
 といふ事でありまして、佛敎で申す修養は自己固有  
 の佛性とといふものを磨き出して、佛となるといふ事  
 であります、乍併此の佛性を開顯して、佛陀と如し  
 赫々たる光輝を放つに至らしむるといふことは、甚だ  
 六ヶ敷い、容易な事ではありませぬ、昔は釋迦牟尼佛  
 が一念發起して、此の迷悶せる人世を救済せやうと決  
 心せられた時に、國王の位を棄て、國家の富を棄て、

花の如き耶輸陀羅、玉の如き羅喉羅をも捨て、金殿玉  
 樓、錦繡綾羅、食饌方丈、悉く此を見ること途上塵埃  
 の如く棄て、顧みないで、唯一裘一褐を身に纏ひ、水  
 を汲み、薪を拾ひ、果實を採て以て修行せられたが、  
 此の位の骨を折らねば、到底人格を高尙にするといふ  
 様な事は出来ない、眞の修養は不可能であるのであり  
 ます、然るに近頃は全く反對に釋尊が途上の塵埃視し  
 て棄られた、官位、名譽、住宅、妻子、或は金縷綾羅  
 を得んが爲に汲々として修養をしてゐるのではあるま  
 いかと思はれるのであります、是によつて見ますれば

佛敎の明・明德といふことの如きも推して知るべき  
 のみで、元來位置とか名譽とか、富或は妻子等の事は  
 物質的方面の事でありまして、科學に屬すべきもの  
 であるから、凡て此に反し修養といふことは、精神上の事  
 であるから、凡て物質的のものは、捨てる位の考が無  
 ては眞の修養といふものは出來るものでない、又其効  
 能も現はれないと思ふ。  
 此に於てか佛敎の明・明德とはどんなことであるか

と申すすと、近來漢學の勃興と共に、大分ハケ間敷は  
 いはれませんが、要するに其意義が不明瞭である、儒家  
 の説明によりまして、明德は天から受たものであると  
 いひますか、然らば天とは如何なるものであるかと、  
 尋ねると其天が實に漠然たるものであつて、蒼々とか  
 活々とか申すすが、其解釋が全くボンヤリしてゐる、  
 固より明・徳といふことが、悪いことでないには  
 相違ありませんが、私は夫よりも今一層ハッキリした  
 ものがあれば、其方がよい、實際の修養に適するもの  
 であると思ひます。

そこで今我宗の教義により申すれば、吾人は生れ來る  
 と同時に、貴賤上下とか或は貧富の別なく、誰も彼も  
 佛性といふ無上の尊い所のものを平等に具へてゐる、  
 然して此の尊い佛性には二種ありますので、一を理  
 佛性と申しまして、之は各人が生來具してゐる處のも  
 の、他の一は行佛性と申しまして、人は生れた儘では本  
 來具してゐる佛性も、只あるといふに止つて、何等の  
 働きも致しませんが、一度佛敎に歸入し、滿腔の熱誠

を以て信仰をする茲に始めて理佛性が發揮して、立派に  
 活動せしむることが出来るのであります、今是を上人  
 の教から申すすと、吾人は御互に事の一念三千の活力  
 ある佛性を具へてゐる、故に其佛性を磨き上げて、佛陀  
 と同じ佛陀と同一の位に上り、佛陀と同一なる働を  
 するといふ事が上人の主義であり、又此が眞の佛敎の  
 修養であります、そこで世間で修養といふが如きもの  
 は吾人自身に、斯かる難有い尊い佛性といふ玉のある  
 事を、全く忘れて論じないのでありますから、修養に  
 はなつてゐないといふのであります、又同じく佛敎の  
 中に置かしても念佛宗の様に、吾人は偏に彌陀の力に  
 よらなければ往生出來ないとか、基督の如く吾人は罪  
 の結晶であるといふて、自己には一も尊いものがない  
 とするのみならず、罪や穢れの結晶であるとし、然も  
 神になり佛にならうと祈り願ふのは、丁度種の無い朝  
 顔に花を咲かせようとすると同じく、根本的に不可能  
 事である、故に苟も修養といふ事を論ずる以上は、先  
 以て各人は佛性といふ無價の寶を本來有つてゐること

を以て信仰をする茲に始めて理佛性が發揮して、立派に  
 活動せしむることが出来るのであります、今是を上人  
 の教から申すすと、吾人は御互に事の一念三千の活力  
 ある佛性を具へてゐる、故に其佛性を磨き上げて、佛陀  
 と同じ佛陀と同一の位に上り、佛陀と同一なる働を  
 するといふ事が上人の主義であり、又此が眞の佛敎の  
 修養であります、そこで世間で修養といふが如きもの  
 は吾人自身に、斯かる難有い尊い佛性といふ玉のある  
 事を、全く忘れて論じないのでありますから、修養に  
 はなつてゐないといふのであります、又同じく佛敎の  
 中に置かしても念佛宗の様に、吾人は偏に彌陀の力に  
 よらなければ往生出來ないとか、基督の如く吾人は罪  
 の結晶であるといふて、自己には一も尊いものがない  
 とするのみならず、罪や穢れの結晶であるとし、然も  
 神になり佛にならうと祈り願ふのは、丁度種の無い朝  
 顔に花を咲かせようとすると同じく、根本的に不可能  
 事である、故に苟も修養といふ事を論ずる以上は、先  
 以て各人は佛性といふ無價の寶を本來有つてゐること



を認識し、此の上に築き上られた修養法でなくてはなりません、若しさうなかつたならば、全く空中の樓閣同様なもので何の役にも立つものでありません。然らば佛性を磨くには如何なる方法を用ゆべきかと申しますと、私は之に大體二通りあると思ふ其第一は哲學的修養、第二は宗教的修養であります、第一の哲學的修養法と申すのは、箇條的に一々磨くのをいひ、第二の宗教的修養といふ方は、大本的で、一の大本なるものを捕へ來つて、夫をよく磨くのであります、佛教中既に此の二種の修養法が説かれてあるのであります、何れかと申せば、第一の方の説明が其大部分を占めて居る様に思ひます、就中釋尊の四位の修行中の事を説いた、佛本行經の如きは殆んど箇條的修養のみを説いたものかと思ひます、今其中の一二を擧げて申すれば、此所に一朵の清き荷花が咲いて、馥郁たる香を放ちつゝあるのを見ては、同時に我も亦斯の如く心清らかになり、又他人にも同様清麗潔白の花を咲かしてやりたいと、自分が修行すると同時に人々にも修行を勧

めるのであります、又河海を眺めれば、平凡の文士等は青いとか清いとか思ふのみで、従つて蒼波とか渺茫とかの形容をする位に過ぎませんが、佛は決してさうでない、海は實に廣くあり、清くあるが、宜しく我心も斯の如く、廣く且清かるべしと願ふと同時に、願はくば一切衆生の心も亦、斯の如く清く廣きに任せしめたいと、自己を磨くと同時に他人にも勧めるのであります、私は是等の修養は要するに皆箇々のものであると、思ひますから、此を哲學的修養法と名くるのであります、乍併斯の如き修養法では、未だ以て佛性といふ大根原が了解出来ない、佛といふものが何やらわからないのであります、是宗教的修養法の起らねばならぬ所以であります。

宗教的修養法と申すのは、前にも一寸述べました通り、大本的であつて哲學的箇條的なること異り、眞の本調子である、此一本調子が宗教的修養として最も大切なので、所謂無始本有の實在たる佛陀を一心に信仰し、以て佛陀の理智悲願の功徳に養はれ、佛性を

開顯するが、宗教的修養法であります、譬へて見ますると、佛陀は太陽の如く、吾人は草木の如くで、哲學的修養法では丁度草木を植付肥料をやつたと云ふ丈に止まり、未だ太陽の光といふものに接しないからどうしても育たない、然るに宗教的修養法は、有とし有ゆる世界の草木が、植付られ肥料せられた上に赫々たる太陽の光線を受けるのであるから、立派に花も咲けば、木實も結ぶ、是と同じで吾人も佛陀といふ、太陽の光に逢はなかつたならば、現在に於て立派な花を咲かす事も、未來に完全圓滿な佛果を收得する事も出來ないのであります、故に吾人は、理智悲願の佛陀に接し、佛性を開發し大切に生長せしめねばなりません、法華經法師功徳品に、極めてよく此の事が説かれてあるので、吾人父母所生の、眼耳鼻舌身意の六根を擧て、其六根其儘の肉體が大活動大飛躍をする事を説いて、眼に千二百、耳に八百の功徳を擧てあります、今一一擧ますと非常に永くならずから省きまして、只一つの口に就て申て見ますと、一度佛性を開顯致し

ました人の口は、能く毒を變じて藥とし、一度其人の口を借て出た言葉は萬人を感化し、功徳利益を及すと云ふ様に、實に偉大なる活力を有して來るのであります、それが私共でありますと、偶御話しても、僅か十人か二十人の人をも眞に感服させる事が出來ませんが、釋尊であるとか、日蓮上人であるとかいふ、御方の一言一行は、其當時の人々は勿論の事、何百年何千年後の今日の吾人に迄、無限の感動を與へ、無限の功徳を及ぼし、其一言一行は悉く、慰安となり、力となり、光明となつて働いて居るのであります、今是を世間から申しても、伊藤博文の如き人の一言は、一國否五大州の人の耳を聳動する、然らば彼の口が並より大であるか、或は構造上異なる所でもあるかと申すかと、決してさうでない、伊藤博文が五大州の人の耳を動かすも釋尊や日蓮上人の御言葉が、何百年何千年後の今日尙大飛躍をしてゐるのも、皆修養から來てゐるのであります、故に若し修養の無い人の口でありますと、田夫野人或は三尺の童子をも教訓する事は出來な

いのである、然るに此の宗教でいふ、一念三千の體を具へてゐるものが、釋尊の御指南に従ひ奉り一心に修養しますると、現在の眼耳等の六根は其儘で、どれもこれも均しく、測り知る事が出来ない程の光を發揮し敏活なる働をなすに至るものであります。

併し孔子も論語の中に、根也慾あり焉、苟得んと言はれた、これは或人が根は剛者だと云つたのを孔子が聞いて、まだ根は嗜慾があるから眞の剛者とは云へぬと云つたのであります、嗜慾がありては儒の道さへ剛者になれぬ況んや、佛教眞實の修養をやである。要するに佛教の修養といふ事を、一言にして申しますれば、本佛の實在を認めて、自己を完全に發育せしむるといふことであります、そこで此の實在さへ認めれば、夫で事足るやうにも考へられませんが、堅實なる信念を繼續する爲には、どうしても形式をとる必要が生ずるのであります、嘗て或西洋人は唯此形式丈を見て東洋の宗教は形式である、といはれたさうであります、が、是は大なる誤解で、實在を假に形式に寫したので

眞實位のものか、今は果してどの位の働きをなしつつあるかと、反省し心に念じて、拜みましたならば、其間に無限の功德利益といふものを得て來るのであります、故に我が開祖も「因茲謹開其名一人者、盡三二安執於一時、一拜此像、輩者、證三菩提於一念」と仰せられました、眞に誣べからざるの言でありませ

以上は修養といふ事に付しましては、序分といふ様な考で、御話致したのであります、要するに哲學的修養は簡條的で、宗教的の修養は本本的である、然して我宗に置ましては圓具の大本尊に向ひ奉り、一心に渴仰の念慮を以て、信念口唱の題目を修行する事が、第一義であるといふ事に、歸着するのであります。

尚終りに本尊に向ひまして、夫に接觸するの行として南無妙法蓮華經の題目を唱へるのであります、此南無と申すことは、歸命或は稽首といふ様な意義がありませので、南無と一言口唱した時、己にも夫の境界を超越して、一躍佛位に入るのでありますから、中々

ありませすから、其意義根底が深く、又甚だ重いので、本宗に置ましては、所謂十界圓具の大本尊を、唯一至上の形式と致しまして、是に向ひ奉り朝に夕に信念口唱の修行をするが、修養の第一義であると思ひます然るに今日迄多の人々が、本尊に向ひ信念口唱はするもの、甚だ力無いのが多い様に思はれるのであります、元來信念口唱といふ事は、文字の示す如く、信ずるといふ上に於ては、佛知一體となるは勿論の事、念は念持不忘と申して、心の中に刻み込込だ所がなくてはなりません、故に吾人が本尊に對し奉ては一心に信念口唱の題目を捧るといふ事が、修養の、第一義であります、此の本尊は十界圓具で、上は佛界を始め、下は地獄界に至るまで、悉く網羅して、皆唯一本佛の慈悲の光明中に、包まれてあるのである、故に吾人と雖も、一度修養を積んだ眼光から見ましたならば、實に整然として、本尊慈光の體內にあることがわかるのであります、故に本尊に向ひましたならば、其時は必ず自分は今、聲聞の位置か、緣覺の位置か、夫とも地

深遠な意義が含蓄せられてあるのであります、今之を喻へて申すすと、南無を唱へない前の人は丁度、權禪一枚平坐で臺所に居る人と同様である、一度南無を唱へた人は、床前に禮服を着て出た人と同じく、其態度は儼然として、權利も義務も位もあるといふ風に、總ての態度が一變してしまふのであります、更に今一つ卑近なる例を擧て申上すれば、彼の將棋の駒の中で歩は最も位低く、從て進むにも、一歩づゝしか進み得ない、弱卒であります、一度敵の歩哨線内に侵入して成金となるや、四方八方に働いて、却て他のものを凌ぐと云ふ様に、佛教に置しても、南無と信念口唱する前の人は、實につさらぬ一步に過ぎませせんが、一度十界圓具の本尊に向ひ、信念口唱の題目を捧ぐるより、現在には立派な花咲き馥郁たる香氣を放つと同時に、又未來には常樂我淨の風にそよめき、不朽の大樂を受る事は、疑ないのでありますから、何卒此の十界圓具の大本尊に向ひ、信念口唱の題目の修行し、唯一無上の此の修養法により、佛果の獲得を期せられん事

を希望致します (元)

左に大學林同窓會に於ける講話を筆記したるものなり

(吉田聖晴筆記)

### 獨立自營の精神

(本化修養談の續)

關田 義 叔

近來獨立々々といふ言葉が、頻りに流行りまして、雜誌にも新聞にも獨立自尊とか、或は獨立自營とかいふ様な言葉は澤山見えて居る、之は非常に善いことには違ひありませんが、どうも其言葉に根柢がない様に考られる、只他人に世話になるな、腕一本でやれ、又誰は小供の時から苦患をしてやつたとか、某は田舎から、飛出して来て刻苦勉勵の結果、遂に今日の位置に出世したとか、又某の人は奉公人の身分より成上つて、今は何千萬の財産家になつたとかいふて居るが、中には随分如何はしい人物までも擧て、頻りに獨立自營を鼓吹してゐる、

如何にして獨立自營の精神を養ふべきか、又如何なることを本にして獨立自營すべきであるかに至つては、殆んど教へて居ない様に思はれる、獨立自營の精神、即ち人に倚頼らずして自ら營むといふ事は、如何なる人にも必要で、無てはならぬものではあります、併し根柢なき獨立といふ事、又基礎の無い自營の精神は、往々にして孤立に陥り偏屈になり、又一種の無謀な喧嘩主義に陥り易いのである、其れのみならず、一時は元氣よく活動しても又直に元氣が弱つてしまふ、そこで意義根柢を有する獨立自營の精神は如何なる職業に従事するにも缺くべからざるものであります、殊に宗教家にとつて最も必要である、古來宗教家が自ら一の信する所を以て、世に立に當りましては、極ふに衣なく時には飢餓にも迫り、或は寝るに處かなといふ様な事が常であつた事は諸君御承知でありませう、けれども斯かる事位は毛頭意にかけないで、不屈不撓に行る、又天下は擧つて反對しようとも屈せざるのみか、愈々勇猛心を振ひ起して以て自己の信する

所を行ふ、之が宗教家の本分でありませぬ、此點に置きまして宗教家は獨立自營の精神が最も必要なのでありませぬ、

我祖日蓮大聖人は殊に此獨立自營の權化とも申上ぐべき御方で、上人の御一生涯は、始から人に頼つて世に立つたのではありませぬので、寧ろ天下を敵として立ち、遂に天下を屈伏せしめて、凱歌を奏した所の御一生涯であります、故に上人の御一代は一方から見ますれば、世界初つて以來今日に至る迄、比類の無い立志傳であり、又一面から見ますれば、獨立自營の好標本である、上人が建長五年四月二十八日立教開宗せられた當時といふものは『日本國の中に唯一人南無妙法蓮華經と唱へた』(妙密抄)と言はれた通り、上人の御考は何人にも頼らうなどとは夢にも思召されなかつた、故に御自分が血を分けられた兩親始め、多年恩愛を蒙りし師匠にも、其膝下を去るは實に忍び難くあつたでありませうが、主義信仰の上には反旗を翻へし、従つて師匠其他の人々に厄介にならうといふ様な考は

毛頭無つたのである、でありませぬから建長五年の立教開宗は、只自己の御決心一つであつた、自己の大誓願唯夫丈を頼りとし、全天下を敵と致され茲に奮闘すべき初陣に立たれたのであります、故に師匠も親も、又多年の學友も兄弟弟子も、當に反目するのみか、從來大信徒たりし東條左衛門景信の如きは上人を殺害せんとするに至りし程の敵中の大敵と變つたのである、けれども、上人としては斯んな事は既に已に覺悟の前で、少しもピクとも爲さない、自らは『日蓮が景信に怨まれて清澄山を出たのは、是れ實に天下第一の法華經の奉公であるのだ』と語られた位で、出發の當初から確固不拔なる獨立自營の御精神を有つて居られ何人が如何云はうとも斷々乎として行る、又自己の信する所を以て世の中を従はせすば止まないといふ大決心で御立ちにはなつたのである、上人としては世の中の毀譽褒貶とか迫害とかいふ事は、初めから眼中に置かない、寧ろ開な事は超越して居たので、當初より『上一人より下萬民に至るまで

法華經の神力品の如く一同に南無妙法蓮華經と唱へ給ふ事もやあらんすらん」といひ、「法華經の廣宣流布は大地を的とする」いふ所信を以て起ち、世界萬民を救ふ可き法華經が弘まり日蓮が事業の成就する事は、宛も大地を的として矢を放つが如きもので、外づれつこ無しだといふ考へで活動したのである、斯る譯であるから、従つて亦獨立自營の決心も非常に強くなければならぬ、

鎌倉に遊ぶものは、名越といふ處の路傍に「日蓮水」といふのがあるを見るであらう、これは世に云ふ「豫言者故郷に容れられず」の格で、わが生れ故郷に容れられざる上人が更に滿天下を對手として自分の所信を斷行しようとして、獨立自營の大抱負大決心を以て、遙々房州より此の鎌倉の地に來り、名越で一寸休んだ時に、初めて一杯の水に咽喉を潤はされたのが、抑も此の日蓮水なのである、此の當時天下の膝下たる鎌倉には、立派な寺々が澤山あり、就中鎌倉の五山なぞといふは、北條一門の篤き保護の下に、堂塔高く雲

に聳え、高僧碩徳も多く居た、而うして上人は此の時一人の味方もない、否上人の法華經主義の宣言は、寧ろ敵の重圍の中へ一人で飛び込んだので、丁度猛火の中へ裸で飛び込むようなものだ、此の時に際し無限の感慨を齎らして、此の一杯の水に喉を濡はしたる上人の心の中は如何であつたか、實に此の「日蓮水」こそ上人が眞に獨立自營の精神を發起せられた記念水であらうと思ふ、

爾來上人は、鎌倉の大町小町などいふ十字の辻に立ちて大空を天井とし大地を藪として盛んに廣長舌を振ひ、佛教諸宗の謬亂を匡し王法の頹廢せるを慨き、北條一門が大義名分を誤りたるを責めた、然しながら上人の正義の主張は當代に容れられず、飲他毒藥の病人等には、怨まれ嫉まれ妬まれ、猶多怨嫉と經文にある如く、實に上人の四面は皆三類の仇敵を以て滿たされて居た、

上人が「日蓮は父母兄弟師匠同朋、上一人下萬民一人も漏れず父母のかたきの如く謀反強盜にもすぐれ

て人ごとに怨を爲すなり(千日尼抄)」と仰せられしが如く、固より語らふ友もなく、一人として與みする者もなかつた、獨立自營といふ事は、天下に多いであらふが、上人程偉大なる豪健なる獨立自營は他に類を見ないであらう、斯くも自己一人を以て奮闘せられた其の結果は弟子として日昭上人を始めとし日朗上人等を、檀信徒としては富木播磨守四條金吾頼基等いふ當代の名ある人々が上人に服従して來られた、即ち上人は決して世に諂ひも妄従もしない、曲れる濁れる世を厭つて立ち、然も世を従はしめたのである、上人は今この者の様に、此事が成就するであらうかどうか、等と毛程も疑はなかつたので、寧ろ天下をば敵として立ち用いようが用いまいが少しも意にかけさせられず、今天下幾千萬の小供は皆悉く毒藥に酔ふて居る者である、故に此良藥を服せしめねばならぬと身自ら最後の勝利者であるとして立たれたのである、譽れを十方偏陀の願海に流すべき靈界の名譽者として立たれたのである、故に上人の獨立自營の精神は超然とし俗界を

出で常に活々として光を放つてゐたのである、意氣揚々として活氣に富んで居たのである、然し上人は伊豆に流され龍口の首の座に座り佐渡に流されるなど四個の大難無量の小難を蒙つたが、此の光ある意氣衝天の獨立自營の御精神は、如何なる惡逆無道の北條一門も如何ともする能はずして、遂に上人に屈伏し、莊田一千町歩を寄附し愛染堂の別當として、武運長久を祈つてくれと言つて、暗に今迄の罪を謝された、實に一千町歩は大變で米であれば二三萬俵もある、即ち北條は罪を謝すると同時に上人に喰はしむるに利を以てしたが上人は斷然之を退けて、日蓮の主義を用なかつたなれば、何程のものを寄附しようとも應じない日蓮大法を弘むるに當つては、そんなけちな心は寸毫もないのであると、全然其供養を退けられたのである、是は實に各宗高祖傳中に比類のない事でありまして、傳教大師といひ、弘法大師といひ、皆時の皇室或は將軍家に頼つて宗旨を弘め殿堂を建立したが、上人は反對に主義の爲に一千町歩の寄附を退けられた、之を以ても上人

が如何に獨立自營の精神に富で居られたかは察するに餘りある次第であり、實に宗教家は斯くなくてはならぬ、又此の上人の風を學ばねばなりません、然るに僅かの利欲に驅られたり、世の毀譽褒貶位の事で、大道念を失ふような事があつたならば上人に對し何共申譯次第の無い事である、そこで北條氏では一千町の寄附を上人が退けられた、後宗旨弘通狀なるものを下附せられた、それは

頃年眞法の威力御威尤も深し、三國比類なき妙宗、後代有り難き尊僧、日本國中に於て宗弘妨ある可らざるもの也

之に對して上人は又も次の如く申された日蓮が二十年來北條を諫めたのは、こんな紙一枚を貰はん爲でない日蓮法華經を弘むるは佛勅を蒙つて來たのである、北條の罪を悔しめ日本國中の人々を救はんが爲に來たのであると言はれ、奮然袖を拂つて退けられた、實に上人の御一代は御自身の信仰を行はんとして、將又夫を行ふには如何なる艱難をも忍ばれたのであります、

す取り戦へば必らず勝つといふ様に到る所に三類の敵人をも伏し幾多の信男女をも得られたのである、

次に延山に御退隱になつてからは如何なる御生涯を送られたかと申すに、上人の書物によつて見まするに、檀信徒からの供養を受られた事も事實ではあります、尙注意すべきは身自ら耕作せられたことで、檀家の供養は受けたが、さりとて殊更寢食して供養を貪らふ等とは夢にも思召されなかつた、之といふも一は弟子信徒共が日蓮が死後に至り懈怠心を起し徒らに供養を貪つてはならぬとの御訓戒である、或に六老僧も上人の滅後よく其の御心を繼ぎ、延山に上人の墓を守りながらも、相共に耕されたといふ事で、現に六老僧と言ひ傳へられて、其古蹟が在してゐる、今日勤ともすると只々功成り名遂て寢て居て食はらう等と思ふ徒輩が多いが、須らく猛省すべきことであると思ふ、殊に吾人布教傳道に従事する者に於ては、心得置くべきことである、能く言ふ事で、彼の寺は一人扶持の米しかないが、あれで布教が出来るかしらんとか、寢てゐて

さりとして上人はどこまでも孤立して喧嘩を好むといふ様な卑劣漢でもなかつたのである、故に吾が主義を自覺したる者は來れよかしと、飽迄獨立自營の精神は一貫して働かれた、此間の消息を上人は次の如く漏されてゐる「日蓮をば日本國の人、上一人より下萬民に至まで悉くあやまたんとせしかども、今迄かうて候事は一人なれども心の強きによるるべしと思ほすべし、(乙御前御書)」

即ち日蓮をば天下舉つて妨害せようとしたけれども、今迄巍然として自信を行ひ敵をも屈伏せしめた事は、一人であるけれども心のつよき故だと仰せられて居る、實に壯快な御言葉であります、媚びず諂はず、佛勅を全し堂々として弘法せられたのは、確固たる獨立自營の精神を以て貫かすんば止まないとの、大決心であらせられたからである、又上人が佛滅度後二千二百餘年が間何人も南無妙法蓮華經と唱へず日蓮一人聲も惜まらず唱ふるなりとは、實に超然として世俗を脱した獨立自營の精神が満ち居たからなので、攻れば必

食へるかとかいふ様なことでは、宗門の振はないのも不思議はない、殊に地方の寺院などはさうである、元來寺に田地を附たといふ事は、正義の弘通者を飢餓させてはすまぬといふ所から、寄附せられたものである然るに今や斯つて獨立自營の精神をそと道具となつてゐるといふに至つては轉々嘆聲を發せざるを得ない、今後、世に立んとするの諸氏は斯かる徒輩を夢想だせす、能く其主旨を辨へておかねばならぬ、

最後に置まして、上人の獨立自營の精神が、一種特別である事に就て一言しようと思ふ、一體上人の如き御精神が何處から來たものであらうかと考へて見ますことは、非常に價値ある事でありまして、大體二つに分けて見る事が出来るのであります、

其の一は一切衆生を救はらうといふ大慈悲の觀念から來たものでありまして、迷へる衆生を救はんが爲めに、不惜身命の折伏弘通を爲されたので、丁度世の中には、我が子が可愛いと云ふ慈愛の爲めに、即ち其の子供を思ふことの切なるが爲めに、非常なる獨立

自營の精神を惹き起すことがあるが、實に上人の御一生は、此の恩愛深き父母であつて、「一切衆生異の苦を受くるは日蓮一人の苦」といふ様に大慈悲の爲めに有らゆる艱難と戦つたのである、此の東京市内でも、下谷の萬年町とか、四ッ谷の鯉ヶ橋とか云ふ處には澤山の貧民が居る、随分と生活に困まるのだが、彼等は有らん限りの獨立心を起して働さ、如何なる艱難辛苦をも厭はずして、自ら助けつゝ、一生懸命に、晝間は無論のこと夜小兒が寝た間にも内職をして迄、小兒を育てる即ち上人が、諸有迫害を忍び飢渴をも寒さをも心にかけ給はず奮闘せられたのは、大なる親心即ち一切衆生を思ふ所の大慈悲の御精神から喚び起されたのである、上人が「日蓮が慈悲廣大ならば南無妙法蓮華經は末法萬年の外未來までも弘まるべし」と言ひ、「難を忍び慈悲の勝れたることは、天台傳教に對しても恐れを懐く程である」と仰せられ、また「法華經の良藥を一切衆生の口に嘗めさせんと願む慈悲である」

(25)

しや天下の人々が悉く捨て、も佛陀のみは、常に我を護り我を慰み我を慰め給ふ、所謂上人は「佛陀常護の信念に」住し給ふたのである、従つて上人の活動する所、喰へようが喰へまいが、そんなことは問題外で、此の肉身は僅か五六十年で亡ぶる、唯此の肉身が活動したる奮闘努力や正義の信仰等は悉く材料となりて、更に偉大なる實在不滅の佛陀格を現出するものと信じたのである、是れ實に上人の活動の上に常に赫灼たる希望の光を與へて居たる「永生不滅の信念」であつたのである、上人が開目抄に「詮する所は天も捨て給へ、諸難にも逢へ身命を期とせん……我日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん、……日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかはしからず、未來には大樂を得べければ大々悦ばし……」と言ふて、佐渡の雪中にありて意氣倍々盛んにして、大なる法悦に充たされて居たのは、是等の信仰が、上人に常に活力・靈力を與へて居たのである、久遠實在の本佛の救護中に生活し常住不滅の秘業

と言はれたるが如きは、實に上人の獨立自營の精神が如何なる精神から送り出でたか分るだらうと思ふ、世に獨立自營の人は澤山あるが、斯る人類救済といへる大慈悲の高潔なる道念より流れ出でたものは少ないであらう、吾人が獨立自營の心を喚び起すに當りては少くも此の高潔偉大なる一要素を欠いて居るなれば、眞乎の價値あるものとは言はれまい、

次に第二に、上人の獨立自營の御精神は、上人の大なる信仰から來たと思ふ、此の信念こそは、前項の親心即ち慈悲心を起した根底とも言ふべきものである、此の信仰の中に於て、(1)永生不滅の信念と(2)佛陀常護の信念との二つがあつて、これが常に隠顯錯綜して、上人の信仰を支配し、而して上人の獨立自營の精神を非常に固からしめたものである、

故に上人は、獨自一己の所信を提さげて、献身奮闘するに當つては、何人をも相手としない、父母師匠をも兄弟をも朋友知己をも相手としない、況や權門豪家をやである、唯活ける佛陀を相談相手とせられ、よを服しつゝある上人には、生も可なり死も可なり、即ち「七難に怖れなく三途にはかりなし」である、死よ直に來れ、唯今佛果に叶はん、生よ續け、我れ倍々勇猛不退に向上不滅の功徳を積まんといふのである、こゝに至つて上人の活動には、死生共に超越して居るのである、

即ち上人は難に遇はうが殺されようが、一切衆生に妙法の大良藥を服せしめずんば止まない、日蓮は此の奮闘活動を経て始めて佛に成り得るのであるといふて、此の實在不滅の信念が、非常に上人の獨立心を強からしめたのである、従つて又一方には、本佛常に救護を垂れ、日蓮の生を助けて法華弘通の天職を盡さしめ千難を破り萬苦を忍ばしめ給ふとの、佛陀常護の信念が常に頭上に輝き、佐渡に在て「大覺世尊日蓮が頭にかわらせ給ふ」と仰せられ、又「教主釋尊衣を以て覆ひ給ふ」と實感を遣べられ、四個度の大難、無量の小難を踏み破りて、漸く世の中の人々も上人の偉大なるを知りしと、共に、上人自身も亦艱難を経來ると共に、

獨立自營の心は更に鞏固となつた、  
死に對して無限の喜びがあつた上人は、生にも無限の喜びがあつた。『悦ばしい哉釋尊影中の明珠、今度我身に得たることを……』未だ見聞せざる教主釋尊に待し奉らんことよ』といへる未來向上の大なる感謝あると共に、生の活動奮闘に對しても亦『靈山淨土の釋迦牟尼佛等顯に加し冥に加せずんば、一日も安穩なるべしや』との大なる感謝があつた、此の生死一如の大安心大法悦は、上人をして、生死の險道に處して其心安きこと樂園を逍遙するが如く、人生の努力勇戦に對し、畏れ無きこと師子王の如くにして、此の偉大な信念上に上人の獨立自營心は、何人よりも強く發揮されたのである、

思ふに斯る、高潔雄大な大道念より滾々と湧き出た獨立自營心でなければ、恐くは平然として世上の狂瀾怒濤の上に立つて居ることは出来まいと思ふ、以上之を要するに、上人の一種特別な獨立自營の精神は、人類救済の大慈悲心と、法華經に依つて得

たる信仰とに依て發揮されたものであるが、何卒我々は上人を師表として倍々本化の大道念を涵養して、根底あり意義ありて而も絶大なところの獨立自營の精神を修養致したいものであります (完)

不思議なる事實

瓜哇人の一番怖かるのは鬼である實際不思議で僕(伊藤氏)なども遭つた事があるイヤ眉睡ではない實際だ夜中など不意に茶碗の中などへ梵字の様な物が歴々と現はれる事がある瓜哇人は夫を見ると鬼が出たとて非常に恐れる又風が頬に當つたと思ふと前歯が一時にスツカリ抜落ちて了ふ事がある又ハツと思ふと男根が落ちたり手が落ちたりする其他不思議が幾程でもある之は如何いふ譯か解らないが全く事實である夫で土人は皆之を鬼の所業として非常に恐れ之を防ぐ爲めにガンヘルと云ふ赤い染料で爪を染めて鬼除をして居る  
三年間南洋瓜哇島を遍歴し本年六月歸朝したる伊藤直矢氏の談(七月一日報知新聞)

報道

天晴會講習會

天晴會第二回夏期講習會は喉て廣告せられたる如く七月廿日より一週間東京一ツ橋外帝國教育會講堂に於て開會せらるる第一日は天晴會の例會を兼ねての事として午後三時頃より天晴會々員の集集するもの相續き午後五時出席會員四十餘名に達し、階下の食堂を開かれ食事中松本幹事より講習會開催に關する要件の報告あり、時餘食堂を閉ぢ休憩中會員として講習會中應分の寄附を爲すべく申合せ、直に記帳せりし金額忽にして五十餘圓に達す、會員諸氏の護法心厚き感すべき至りなり、午後七時振替一審講習會の開始を稱す、開會の式は幹事に依つて左の如く揭示せらるる  
開會宣言、祖書朗讀、開會ノ辭、報告  
右順次終つて講演に入る、第一席  
迫害に對する日蓮上人の態度小林一耶君  
引例の巧妙なる如何なる難問題をも容易に了解せしめるの外は感歎の外はない、第二席  
日蓮上人の信仰 本多 日生君  
上人の信仰をば、一、上人の信仰と我等の信仰二、上人の信仰と宗教の眞髓 三、上人の信仰と宗教心の全面 四、上人の信仰と將來の宗教 五、上人の信仰と帝國の使命 六、上人の信仰と最善の形式の六段に分ち論ずる中

本日は一、二の兩段に就て論ぜらるる  
第二日(廿一日、木曜)第一席  
日蓮上人の信仰 本多 日生君  
第三段上人の信仰と宗教心の全面に就て論ぜらる、第二席  
世界統一は誇大妄想なるか 高島平三郎君  
丁酉會理會雜誌の某氏の評論に對し詳細なる論評ありて、六百年前日蓮上人に依りて唱道せられたる統一主義を主唱せらる、第三席  
佛界緣起論 野口 日主君  
上人の佛界緣起論と各方面との關係を詳細に論ぜらる、  
第三日(廿二日、金曜)午前靈寶拜親の爲め八時廿五分兩國橋發中山に向ふ 九時中法華經寺着、全書書院に於いて丁重なる待遇を受け院家諸氏の立會にて、宗祖御自作と唱ふる一尊四士の像儀及鬼子母神、運慶作の虚空藏御眞筆佛陀羅尼常二師の本尊、御眞蹟内外數十通古文書、小松原御經の時の御製發念數等を拜親し終つて太田殿邸跡の案内を受けたり最急行を以て拜親しつ、其時間を要する三時間に及べり如何に靈寶の多数なるやを推すべし 午後五時歸着、定刻開講 第一席  
日蓮宗と織田信長 文學博士辻善之助君  
前後二席に亘つて安土宗論に於ける真相を明し古來日蓮宗の榮りつゝありし汚染を奪き織田氏の日蓮宗に對する其態度を論明せらる引證該博論理森然、流石に専門の博士なりと感服の外はなし、辻博士の講演にて時間到来開會

第四日(廿三日、土曜)定刻開講、第一席  
日蓮上人の大義名分論 關田 義叔君  
上人主唱の一佛一王論より設き起して縱橫無盡に論辯せらる、第二席  
日蓮上人と源光國郡 松森 靈運君  
源義公が帝王の義は全く日蓮主義の感化に依る、世俗の所傳は誤謬なりとて年代の相違等より立證せらる、  
第五日(廿四日、日曜)定刻開講、第一席  
迫害に對する日蓮上人の態度(續) 小林 一耶君  
前日に繼續して講演せらる、  
第六日(廿五日、月曜)午前池上靈寶拜親山務當局の丁重なる待遇を得、注法華經其他靈寶拜親す、中山と云ひ池上と云ひ特に本會員の爲め拜親に關して便宜を與へられたるは感謝の外なし、定刻講演開始、第一席  
日蓮上人の信仰 本多 日生君  
第四段上人の信仰と將來の宗教とに就て論ぜらる、第二席  
西人の法華經觀 柴田 一龍君  
アー、ア、ア、ロイド博士の法華經觀を紹介せらる、第三席  
日蓮主義と大體平八郎 嶋田 幾洋君  
大體平八郎は日蓮主義を奉じたもの、大體が一生の行動は王陽明の知行合一と日蓮上人の活理主義に感化せられたるなりと論ぜらる  
第七日(廿六日、火曜)午後二時より茶話會、出席者六十餘名、幹事の指名にて起立各自原籍、宗旨、職業等を陳へ所感あるものは其感想を演説したり、六時茶話會を閉ぢ、講演に

入る、第一席  
 小笠原長生君  
 寛と嚴と其調節を得て始めて完し、日蓮主義は常識の外にあらす、常識の上にとりて心得べし、第二席として、笑田講師、第三席として、藤田講師、各前夜の續講あり、第四席として、本多講師は講演の殘部第五段第六段の兩段に就いて簡單に其大意を論述せられ、川島海岸少將の發言にて、天皇陛下萬歲、天晴會廣盛を三唱して日出度教會したり、

◎七月の東京教界

◎第一義會 同會の七月例會は同月三日(第一日曜)午後一時半より開會せり先づ例に依り嚴肅なる修法を爲したるが、此の修法は、佛而本多日生大僧正が、編輯固陋なる派見宗辭を脱せしむると共に從來の誤譯多き勸請回向をも一掃して遂には各派統一の中心實權にもなさんと目的にて先般編輯せる簡潔にして而も正確なる回向文に依り、毎會講演約三十分開會の簡便もると異口同音に本門の本尊の御實前に嚴修するものにて、按教誨人會の方にも同機之を應用し居れるが此の修法が他の派に野卑なるものと其機を異にし來集の男女一種言ふ可らざる崇高莊嚴の感を受ふる爲め各男女とも此修法に列なるを非常にも喜ぶ機になれるは奇なる現象なり右修法後左の講演ありたり、聽衆滿堂、

◎佛法の光顯

野川眞應師 本多大僧正

林少將吉田珍雄氏等の發起に關する講妙會の法華講演は昨年秋已來毎土曜日午後一時半より法華北清島町統一園に本多大僧正の講演を請ひ背頭壽量品を講じて已來序品方便と順次に講じて或は文句々々を講じて或は遠意の提要を講じて已に連門十四品を畢り更に本門に入りて再び壽量品を講じ目下の處に於ては不經品を講じ居れるが今後數回にて結講となる豫定なり聽講者は重擊敬虔の士のみならず入會を許し居れるが其れにても毎會數十名あり是等の中にて最も熱心に殆んど缺席なく講議に待する人々左の諸名士なり

陸軍大佐松原峻三郎君、聖城秀登君、海軍大佐子爵小笠原長生君、外務省翻譯官藤永邦君、岡田中慶三郎君、海軍主計中監大谷幸四郎君、陸軍少將林太一郎君、海軍少將川島令太郎君、法學士子爵五島盛光君、大審院檢事板倉松太郎君、同院檢事矢野茂君、海軍少將舟木謙太郎君、増、松次君、陸軍工兵中佐岩田一樓君、岡田養叔君、井村日成君、妙教婦人會幹事藤賀秀太郎君、辨護士吉田珍雄君、同松本郡太郎君等、

是等の人士に皆夫々相當の地位名望を有し繁劇なる職務に従事せるに關らず各萬障を排して出席聽講せらるるは求道心の熱烈なるに由らずんば出来がたきことなりとて本多講師自身も非常に感歎し居れり、七月は九日第二

◎日蓮宗義青年會 十七日(第三日曜)開會、本月は各學校共既に暑中休暇にて會員の多數に既に歸省し、在京中の者は學期試験にて聽講の餘裕なく、爲めに本月の會合は甚だ振ほざりし、殊に主任講師本多大僧正は四五日前より御不例にて當日出席無かりし爲め出席會員は失望せらる、野日關田兩師の出席ありて、定刻より左の講演あり、終つて茶話會を開き、關田師例の快辨を以て活々數萬言談論縱橫會員の質問に應對せられしかば、各自満足の意を表し午後四時散會したり

◎妙教婦人會

野日 日主師  
 例の會合日と爲せるも本月は都合により特に十八日を以て會合日とし、定刻より修法の後左の講演ありたり

◎佛法の家庭(其二)

野日 日主師  
 本多大僧正の佛敎女性觀は從來佛敎各宗が唱へ來りし佛敎女性觀は未だ佛陀の本旨を得たるものにあらず、法華經に顯はれたる女性觀は女性の美德は正に此れ絶待美の反映なりと認識するが法華經の女性觀即ち佛敎女性觀の眞髓なりと喝破せられしに滿場の女性何れも大満足の見受けたり、本論は人生觀上の大問題なれば此が筆記は追て本誌に掲載すべし、講演終了後例に依つて、茶菓を供し來八月は本多講師の關西巡講あらせらる、と且つは極盛中なれば一切の講演は休止し、九月

◎橘香會講演

同會にては是まで東洋大學講堂にて本多大僧正を請して講演を聽き居たるが、去る六月より毎月第二日曜午前十時會員一同淺草北清島町統一園に集會して講演を請ふこととし目下「日蓮上人の本尊觀」にてふ題下に講演を聽き居れり

◎大阪天晴會

第二例會は六月四日夜東區唐物町一丁目南盛組事務所に於て開催、會衆十七名、先づ上人の人格(智的方面)に就て

榎木 日、氏  
 講話を試み、次で松尾英四郎、清水英吉の兩氏、所感演說並に討論あり、幹事池田爲三郎氏より會務に就ての協議あり、十一時過散會第三例會は七月九日夜東區安土町四丁目若鷲南組合事務所に於て開催、會衆十五名、例に例り先づ左の講話あり

榎木 日、氏  
 上人の衛生的方面に就て、池田爲三郎氏次で友廣善夫、清水英吉の兩氏は、右池田氏の説に就て所感を述べ、夫より本會に就て榎木氏の演說あり、清水氏より佛敎問題の研究提議を提呈し、池田氏の賛成意見、松田甚八氏及び榎木氏の反對意見あり、終て池田幹事より來る八月七日大講演會開催に就ての協議

榎木 日、氏  
 上人の衛生的方面に就て、池田爲三郎氏次で友廣善夫、清水英吉の兩氏は、右池田氏の説に就て所感を述べ、夫より本會に就て榎木氏の演說あり、清水氏より佛敎問題の研究提議を提呈し、池田氏の賛成意見、松田甚八氏及び榎木氏の反對意見あり、終て池田幹事より來る八月七日大講演會開催に就ての協議

榎木 日、氏  
 上人の衛生的方面に就て、池田爲三郎氏次で友廣善夫、清水英吉の兩氏は、右池田氏の説に就て所感を述べ、夫より本會に就て榎木氏の演說あり、清水氏より佛敎問題の研究提議を提呈し、池田氏の賛成意見、松田甚八氏及び榎木氏の反對意見あり、終て池田幹事より來る八月七日大講演會開催に就ての協議

より例日定期開會の旨を披露して開會、時に午後四時三十分

◎實業青年精神修養講演 晝間各種の業務に従事せる實業の青年殊に各種商店の主人店員職工等の爲め道德及び宗教を根柢として健全なる信譽を興へ人格を向上せしむるの目的にて、關田養叔氏は今回有志の實業青年を糾合し自坊淺草南松山町法成寺内に德敎青年會と稱するを以て毎月一日十五日夜講演を開く事とし去る五月より實行せり其講題等は左の如し

◎人道の大本

關田 養叔氏  
 六月一日夜

◎實業家と精神修養

同 氏  
 同月十五日夜

◎成功の基礎

同 氏  
 同月十五日夜

◎人生と信仰

同 氏  
 同月十五日夜

◎小林立大僧正の御進教 中國地方遊教中の小林立大僧正は去々月六日登山せられ七日八日の兩日本山山麓の講演會に出席せられ更に一回寂光寺に出演せられ懇篤なる講演に多大の効果を収めて高田日輪師林老氏を以て八月日古屋に向つて出被せられたり

◎京都通信

◎聖祖門下同志會新計畫 京都日宗各派に依て組織せる同志會にては今回更に社會的一計畫を立て免四人慰問事業を興し市内及郡部に於ける無出獄者、刑執行猶豫者の爲めに彼等が社會より受けつゝある冷遇を慰問し再び犯罪を爲さざる様注意し各警察の賛成を得て先月來實行しつゝあり

◎明徳會設立

西村吉右衛門氏の息喜一郎氏は社會改良の熱心家にして多年研究に志しつゝありしが今回同志發起として明徳會

市郡十警察署内擔任者 田上寛靜、今井即明、中村寛澄、鈴木孝碩、富谷英壽、布目南澤、明渡惠教、中澤眞立、川崎英照、村上日修、杉原基冠、石田教秀の數師なりと云ふ



なるものを興し、社會の善惡及感徳の原因結果を研究して其善徳を榮め惡徳の矯正を目的とし、講演會を開き印刷物を配布し及毎月一回研究會を本山妙滿寺に開く由にて新道の熱心家を以て會員とし、宗教家、教育者、新聞記者等にして幹事は中村寛澄、川崎英昭、西村喜一郎の三氏なりと云ふ

### ◎千葉縣監督布教

千葉縣には上總七里法華の靈域を存し往年宮谷種林ありて八百の宗學生を養ひ隆々として教光を全國に放ちたりしも時代の推移と共に種林を廢止するに到り爾來宗風甚だ不振の狀態に在り然るに近年十里の靈域は自覺より起ちて天分遂行に努力し爰に復興の氣運熟しつゝあるを見るに至れり教團は誠きに監督布教の制を布き益々生命ある日蓮主義を發揮せしむるに努む

- 開會の辭 秋葉 布教師 三上 布教師
- 眞觀政要を讀て佛敎本義に及ぶ(其一)
- 監督布教師
- 七月四日東郷村龍徳寺に於て修法後講演 三上 布教師
- 調會の辭 日蓮上人の高風 三上 布教師
- 日蓮上人を追想し七里法華復興を望む 監督布教師

七月五日山武郡永田光昌寺に開く特に本多管長親下は東都の講法多忙の際にも不物僅かに二日間の閑を得たりとて参加親教せらるる程下の宣教傳道の熱心以て敬仰に堪へざる也

- 信心之正路 本多管長親下
- 七月六日大網町蓮照寺に於て修法の後講演を聞く
- 開會の辭 小竹 布教師 三上 布教師
- 眞觀政要を讀て佛敎本義に及ぶ(其二)
- 監督布教師

佛祖之正脈 本多管長親下 本多親下は宗教の根本義たる法道論を提唱し來りて百種の社會的事業に在りては生命と活力ある宗教的軌道の發現にあらずんば何等價直を認むるものなしとの想旨を詳々切々懇せらるる依て以て地方人心に大覺醒を興へ美明の効果を奏したり

- 七日片貝本隆寺に開く修法の後 京藤 義隆師
- 開會の辭 三上 布教師
- 眞觀政要を讀て佛敎本義に及ぶ(其四)
- 監督布教師
- 八日佐倉町經權寺に於て修法後講演 夏目 布教師
- 開會の辭 三上 布教師
- 眞觀政要を讀て佛敎本義に及ぶ(其五)
- 監督布教師

眞觀政要を讀て佛敎本義に及ぶ(其五) 監督布教師

- 九日千葉郡濱野本行寺に開く
- 開會の辭 中村 布教師 井口 布教師 三上 布教師
- 眞觀政要を讀て佛敎本義に及ぶ(其六)
- 監督布教師
- 十日東金町西福寺に於て修法後講演
- 開會の辭 横山 布教師 井口 布教師 三上 布教師
- 眞觀政要を讀て佛敎本義に及ぶ(其七)
- 監督布教師

野日監督布教師は政治法律道徳等各部の意義及價直を詳述して佛敎第一義の活力と救済の眞義を懇説し法華を知る者は言法を得べしとの聖旨の活案は歴史上の事實を捉へ來りて人生國家に日蓮主義の光輝ある所以を論明し巡教僅かに縣下を通じて八回に過ぎざりしも唯かに日蓮主義の力と光とを人心の秘奥に傳へ上總七里法華信仰界の復活の導火を興へたるは疑ふ可らざる事實也

殊に巡教講演の聴衆は町村吏員學校職員地方有力者にして亦到所僧員の盡力遺憾なく常に感會を極めたりしは如何に現代思想界に於て精神的缺陷を補足すべく文明的實際宗教を欲求しつゝあるかを知るに足る也故に千葉縣下宗教徒は小日蓮の自覺を以て傳道の聖業に努力せば將來に於て復古的七里法華の靈域を見るに到らむ

## 宮殿●須彌段 前机●幢幡 大販賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度は是れ迄とは一層勉強仕一切各宗の佛具陳列仕置候

### 正價 三法堂佛具發賣目錄

## 注意

佛具と唱すれども此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價發賣目錄書を作製致置候に付御入用の御覽あれ。寺院機方の御入用品一切の買物程遠方でも坐な左の通り安價にて可升。早く取よせ御覽あれ其の正價附の品は



### 佛具卸部

京都市三條 本舖 三法堂藤田總次  
通小橋西入

### 小賣部

同市三條 振替野 大阪二四二五九  
通大橋西入 三法堂佛具陳列場 東京二〇七七一

## 廣告

當山例年せがき法會の儀これ迄舊曆七月を以て執行し來り候處本年より「こよみ」の改正と共に舊曆を廢し新曆九月七日、八日の兩日に改正致し爾後これを定例とし毎年執行候に付此段信徒講中大方諸君に謹告仕候也  
明治四十三年七月

### 上總國山武郡源村上布田 藥王寺執事

毎月一回十五日發行、一部金六錢 稅郵五厘 一ヶ年前金六拾五錢 郵稅六錢 代金ハ振替貯金口座東京二一九番へ拂込マレ  
タシ此場合ニハ講料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候  
明治四十三年八月十五日印刷發行

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地  
發行部 統一團

# 統一



第百八十七號

明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可  
明治三十年八月十五日發行第一號

(每月一日)

(東京 三益印刷株式會社印刷)